

第216回 日文研フォーラム



韓国における日本研究が 語るもの

What Japanese Studies
in Korea Can Tell Us



金 弼 東
KIM Pil Dong

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センター創設以来の事業のひとつです。海外の日本研究者と市民との交流を促進するために、原則月一回、年間十回程度、京都市内の公共スペースで、日文研を訪問中の世界さまざまな国の日本研究者に、自分の研究について自由に語ってもらい、参加者との知的交流を図ろうとするものです。

このフォーラムの報告書の公開によって、日文研フォーラムへの皆様の関心と理解がさらに深まることを願っております。

国際日本文化研究センター

所長 猪木武徳

● テーマ ●

韓国における日本研究が語るもの

What Japanese Studies in Korea Can Tell Us

● 発表者 ●

金 弼 東

KIM Pil Dong

世明大学校 日本語学科 副教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Associate Professor, Semyung University

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



発表者紹介

金 弼 東

KIM Pil Dong

世明大学校 日本語学科 副教授

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Associate Professor, Semyung University

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略 歴

1999 年 3 月 世明大学校 日本語学科 副教授

2002 年 9 月 学術博士（広島大学）

2008 年 3 月 国際日本文化研究センター 外国人研究員

著書・論文等

『日本・日本人論の再発見』J&C、2007

『日本のアイデンティティ』サルリン出版社、2005

『近代日本の民衆運動と思想』J&C、2005

『日本的価値から見た現代日本』J&C、2004

『日本思想の理解』（共著）時事日本語社、2002

I. 韓国社会における「対日観」と「日本研究」

1. 二十世紀における韓国社会の変化

十九世紀の韓半島は、国家財政の根幹を支えていた農民層の崩壊、官吏の不正腐敗に抵抗する広域的な民衆運動の持続、封建支配階級の内部分裂と統治機能麻痺、朝鮮支配をめぐる列強の角逐、指導層の分裂された対外依存意識の拡大など、政治・経済・社会・対外と件いづれを見ても、朝鮮王朝の崩壊と国権の喪失を招きかねない風前灯火の混迷状態がほぼ一世紀の間続いた。

「静かな朝の国」といわれた韓国が、民族の進路さえ開拓できないままに内憂外患の危機に直面しているとき、非西欧世界で唯一に近代化に成功し、日清・日露戦争を制して東北亜の覇権国家として生まれ変わった日本は、ついに韓半島の植民地支配にまで乗り出す。あつけなく国権を奪われた韓国は、民族の魂をかけた独立運動と日本の敗戦により、一九四五年にいたってやっとまともな国家として再出発できる機会を勝ち得た。

だが、その喜びを満喫することもつかの間、米ソの支配下に置かれた南北分断と赤化統

一を夢見た北朝鮮の侵略によって、虚しくも同族相戦の悲劇を味わう奈落に陥る。混沌の十九世紀に次いで二十世紀の幕開けからも、丁度半世紀を異民族支配と民族分断、そして内戦まで経験した世界でもまれに見る国となった韓国を、ジュリアン・ワイズは次のように當時を述懐している。

「不毛の地、岩だらけの狭い国土、焼け付くような夏、陰鬱で寒さが身にしみる荒涼とした大地、天然資源はなく、人口だけがやけに多く、しかも何百万という国民のほとんどが文字が読めない。」

植民支配と内戦に終止符を打ったものの、長年の収奪と戦争の惨禍で国の有り様は惨めだった。その荒れ果てた国土の傷痕は、二十世紀後半の出發も自中之乱の状態に追い込んだ。国を復興させられるリーダーシップの不在と、人材、資本、技術、資源の不足のうえ、異民族支配と戦争によって崩れた、転倒された価値観の横行など、暗黒から脱出できるかなるビジョンも自ら提示することができず、不正腐敗と飢餓による社会混迷だけが目立った国であった。

新生韓国の絶え間ない混乱は、結局軍事クーデターによつて収まるようになった。日本が朝鮮特需景気による戦後復興の成功と高度経済成長へ国論を結集している時、韓国で発生した無血クーデターは、韓国社会をさらに疲弊化させる反歴史的な行為になると思われた。だが、政権を握った朴正熙は韓国の根底から改革を断行するとともに、「祖国の近代化」に政権の命運をかけて、世界の賛辞を浴びた「漢江の奇跡」を成し遂げた。

北朝鮮による度重なる大統領暗殺脅威のうえ、工業化に一番大事な技術と資金の不足、そしてGNPの一五%を軍事費に投じる悪条件の中でも「高度に訓練された国民、先鋭的な民族意識、旺盛な民族的活力」²⁾といった精神文化を資産にして、圧縮成長に成功する指導力を発揮したのである。

サミュエル・ハンチントンも、アフリカのガーナ国と同じレベルであつた韓国が、わずかの期間で達成した驚異的な経済成長の背景を「倏約、投資、勤勉、教育、組織、紀綱、克己精神」³⁾などのような文化的価値に求めている。まるで国家富力の源泉は文化にあるという、韓国の民族指導者金九先生の哲学⁴⁾を韓国社会が実践したかのような評価である。

先進国の援助により延命していた最貧国から二十年たらずで不死鳥のように蘇った韓国社会は、歴史の逆戻りともいえる朴大統領の「決断」を、むしろ彼の祖国愛と卓越したリ

ーダーシップの結晶体として受け止め、彼の共產主義への傾倒や親日経歴、そして民主主義の抑圧といった政治・思想的に影の部分があるにもかかわらず、韓国政治史の中でいちばん尊敬できる人物として記憶している。

しかし、近代民族国家形成期から際立った反封建・反帝国の民衆的抵抗意識は、民主化を犠牲にした産業化の延長を素直に容認せず、韓国の民主化運動の動力として燃えつつあった。李承晩政権退陣運動を通じて確認されたそのエネルギーは、一九七〇年代から本格化した反維新運動と一九八〇年代の新軍部統治に対する国民的抵抗の段階を経て、ついに「6・29宣言」をもってその歴史的な使命を尽くすことになる。

こうしてみると韓国の二十世紀は、植民地↓解放↓南北分断↓理念対立↓内戦↓飢餓↓軍事クーデター↓産業化↓民主化という、一民族が直面できるすべての歴史を辿ったことになる。この栄辱の歴史を一言で圧縮することはできないが、大まかに見れば「抵抗」と「反」の時代をへて、「成長」と「統合」の時代へ劇的な自己変化に成功した歴史、それが二十世紀の韓国の自画像であるといえよう。

2. 「成長社会」の対日交流

韓日国交正常化以後、両国は政治↓経済↓文化へと交流の幅を広げながら関係進展を図ってきた。その経緯を簡略すると、まず、政治交流は両国の経済発展を支える形で始まった。しかし、一九七〇年代に入って相次いだ政治事件（金大中、文世光事件）などで両国は国交断絶の危機を迎えたりもしたが、特使や密使派遣による政治的妥協を通じて難局を突破する叡智を発揮した。

そして、一九八〇年代に入っては、両国の首脳が相手国を公式訪問するきっかけを作りながら、はじめて正常的な政治・外交関係の基盤を固めた。その基盤は、韓・中社会を振動させた「歪曲教科書」波動にもかかわらず、少なくとも表面的は韓米日三国間「鉄の同盟」を誇示する段階にまで発展した。

日本政府が「成熟したパートナー」としての日韓両国の永遠の善隣友好関係が世界的な視野で構築⁹⁾されるようになったという評価を下したのもこの頃である。この過程で両国の政治交流は、韓国の軍事情権と日本の保守勢力の結合という多少非正常的な関係が先行したりもした。そのため、両国に跨っている様々な懸案についても、国民的な合意を排除したまま、執権勢力が各種の争点や課題を認識し解決する主体としての役割を独占する不

作用も伴った。

これは、南北対峙という地政学的脅威に、開発独裁論に抵抗する民主化の熱気という内外的不安要因が重なっている中で、体制安定と経済開発、安全保障と対外関係を模索せざるを得なかった時代的狀況が生み出した結果でもある。両国を繋いでいた不安定な関係は、民主化政権が登場してからは全く新しい関係に入るのではないかという期待感を膨らませた。

ところが、一九九〇年代以後両国間の裏の政治交流の断絶、度重なる争点の浮刻、一部政治人たちの軽挙妄動、両国の政治環境の急変などによって、政治交流は全く逆走行するようになった。特に、両国の政治圏に蔓延している偏狭なナショナリズムは、外交的感覚が著しく落ちると評価された盧・小泉政権の下で極に達し、しばしば緊迫した関係を助長する未熟さを露呈したし、その影響は東北アジアの情勢変化とも相俟って、今後さらに不透明な段階に入る可能性を高めている。

一方、緊張に満ちた政治交流とは裏腹に、経済交流は比較的活発であった。両国間の経済交流は、「善隣友好協力」関係の重視という名分の下で、韓国の経済発展の支援と関係改善を図ろうとした日本側の前向きの姿勢にも助けられ、協力借款、人的・技術援助、貿

易拡大、東北亜の経済発展への寄与という結果を伴いながら進展を重ねてきた。

韓国の経済状況も日本との経済協力を強化する以外には代案がなかった上、それを通じて民族の跳躍をかけた朴政権下での基本的な認識が、経済発展のモデルが日本であったこと、また、その後の先進経済の理想的なモデルもやはり日本であるしかないという固定観念によって、対日経済交流は深まる一方であった。

その結果、一九七三年には韓国が日本の輸出相手国として第二位の国家に浮上した。そして、一九八四年には両国の貿易規模が一九六五年より五十二倍に膨れ上がるとともに、総額でも史上はじめて百億ドルを突破するなど、貿易・経済分野は、通商摩擦と対日貿易収支の悪化による韓国社会の反日感情の拡大にもかかわらず、着実に発展的協力関係へと成長していった。

だが、経済交流の拡大が韓国経済に残した構造的弊害も少なくない。政府の政策、企業文化、市場構造、企業金融の分野にいたるまで、韓国の経済文化全般にわたって日本的価値が深く浸透するようになったし、経済・通商分野においても対日貿易赤字の膨張⁹⁾、対日経済従属構造の深化、日本側の技術移転の回避、日本市場の閉鎖性などを経験する不作用も露呈した。

経済交流におけるこのような不均衡は、今後のF T Aの締結によって一層加速されるだろうという懸念を韓国社会に蔓延させ、必要以上に対日警戒心理を高める要因にもなっている。この課題は、日本の協力を得て解決の糸口を掴むべきであるが、韓国経済も体質改善（例えば、技術革新、労使文化の先進化、企業規制の画期的緩和など）と未来産業の育成などを通じて、後がないという覚悟で真正面から取り組んでいく必要がある。

同時に韓国社会は、経済交流の拡大が民間レベルでの交流活性化を通じて築き上げられる人的ネットワーク（例えば、資本投資、技術移転及び共同技術開発、第3国への共同投資、企業の相生協力関係強化、企業の人材交流と人力開発への共同参与など）を含めて、東アジアの平和と安定、世界の経済に占める韓日の経済的プレゼンス、東アジアの経済共同体実現と世界経済発展への貢献といった観点からも、前向きに対応していかなければならない。

政治・経済分野に比べると文化交流は遅く始まったが、経過は予想外にうまく進んでいった。両国の文化交流が始まるようになったのは一九八〇年代に入ってからである。この頃は、日本は文化民族主義と文化外交を国家的レベルで本格化するときであったが、むしろ韓国は既存の文化民族主義政策が後退する兆しを見せているところであった。

そのきつかけは、一九八一年両国の政府が外相会談を通じて「韓日文化交流事務者会談」の開催に合意したことから始まる。この合意は、日本政府による積極的な文化交流推進の意志とこれに対する韓国政府の消極的な対応という形であった。過程はともかく、この合意によって韓国政府の内部からも日本との文化交流に少しずつ前向きな姿勢が現れたが、政府レベルでの合意による交流はあまり実効性を収めることができなかった。

しかし、一九八〇年代の後半から文化界を中心とした芸能交流の拡大、韓国内外の情勢変化による対日関係の再定立の必要性、情報通信文化の発達と対日認識の変化に伴った韓国社会での日本文化の影響力拡大、韓国文化のアイデンティティに関する自信感回復、ワールドカップ共催をきっかけに広がり始めた未来志向的な韓日関係の構築努力、その延長線上で行われた段階的な日本文化開放政策、両国の友好協力関係の増進を図るために推進された各種のイベント文化の定着などによって、両国の文化交流は民間レベルでの交流拡大を伴いながら飛躍的に発展していった。

特に、一九九〇年代の半ば以降、韓日文化交流の拡大と海外での韓国文化に対する予想外の反応は、韓国の文化政策を文化産業の育成と韓国文化の海外伝播に焦点を合わせる動因になった。また、伝統と民族精神の継承を重んじた文化民族主義政策から文化を最大限

に付加価値を創造する二十一世紀の新産業（文化芸術＋科学ⅡCT強国実現）として育成させる劇的な状況反転をもたらしした。

文化交流の拡大は、両国民の情緒的乖離感の縮小に貢献しただけではなく、一九九八年「韓日新時代宣言」の実現、人的交流の拡大、日本社会における韓流ブームなど、交流の活性化が相手の文化的多様性と国民感情、そして両国の関係改善に実質的な影響を及ぼしているのが確認されている。

その意味を韓国社会から見ると、①近代以降日本人の記憶に残っている「朝鮮像」の残滓や否定的イメージの解消に役立ったこと、②「近代化」という観点から東洋文化を過小評価してきた近代以降の日本社会が、やっと韓国文化の底力と価値を発見するきっかけになったこと、などが考えられる。

要するに、歴史的には約四世紀ぶりに、国交正常化以後約四十年ぶりに韓国文化の存在感を日本社会がはじめて認識し、そして韓国人や韓国社会に対するイメージ転換を自発的に試みたということである。日本社会での韓国文化の影響力がこれ以上拡大される可能性は高くないが、少なくとも「上陸」には成功しているだけに、今後の韓国側の努力次代では予想外の展開も期待される。

また、日本社会から見ると、韓国社会内部で根強く残っていた反日感情を相当部分抑えることに成功したばかりでなく、韓国社会における「日流」ブームの拡大、日本に対して「客観的視角」を求める世論づくり、日本との交流における「Multi Track」戦略の当為性、などが韓国社会で定着する成果をあげた。要するに、日本文化の韓国社会への軟着陸を成功させるための「見えざる支援軍」を、交流拡大を通じて各界各層から確保したのである。

韓日交流はイシューの転換（政治↓経済↓歴史・文化へ）と様々な紆余曲折を経ながらも基本的には未来志向的に進んでいる。この方向性が強固になるかどうかは、領土をめぐる日本側の攻撃的な外交政策が、今後いかなる性格を帯びて展開されるかにかかっている。これは、政治・経済的な争点よりもはるかに複雑で難しい問題である。この難題を両国民がうまく乗り越え、いわゆる文化交流の拡大↓相互認識改善↓友好関係増進↓文化民族主義克服↓東アジア共同体構築への貢献というプロセスを実現するためにも、日本社会の努力が要求される。

それは、①歴史的に内在化され継承されている韓国に対する否定的なイメージの解消、②文化は独占や征服、伝播や排斥の対象ではなく、すべての文化市民が享有できる資産であるという文化民主主義価値の定着、③「日本的価値」或は「魅力ある日本の文化」の移

植や伝播に拘らず、民族的・情緒的・歴史的葛藤を解消できる文化交流政策とそれに対する日本社会の共感帯形成、④日本の支配階級の謙虚な歴史認識と強硬右派に対する日本社会内部の良心的な牽制勢力の構築（国民的支持を伴った）などが必要である。

そのためには両国の知識人たちは、何よりも韓日文化交流の活性化を妨げる要因の取り除きに力を合わせなければならない。十八世紀の前半に両国間の善隣友好関係の構築に尽くした雨森芳洲は外交思想の根源として「誠信」の二字を大事にし、それは「実意と申事ニて、互ニ不欺不爭、真実を以交り候を誠信とは申候」⁷⁾とのべている。相互信頼構築の根源がどこから生まれるのかを説破した思想である。

今韓日両国の間に必要なものはいうまでもなくこの「誠信外交」の実践である。その意味の重さを両社会の交流主体が肝に銘じて自分の役割として真摯に考えなければならぬ。現在、韓日交流の中でも意外に遅れている知識人たちによる知的交流をより活性化させ、その過程で蓄積された知的資産を、両国の社会が共有する姿勢に転じるとき、はじめて韓日新時代が開かれると思われる。

3. 「成長社会」の対日観

植民地解放以後、六十年間、政・官・財・学界を問わず、韓国社会の対日認識の実像は、一言でいえば冷静な分析欠如と自己帰責論理の不在で要約できる。日本について、例えば、勤勉で謙遜な民族がなぜ排他的で対外膨張主義的な相反する文化構造を形成していたのか、経済的な側面からみると、日本の伝統的な価値観を温存しながら近代国家へ成功的な変身を成し遂げた国なのに、どうしてそれが可能であったのか、などのような一番基本的な理解さえも等閑視した。

戦後の歴史を見ても、敗戦後の国家作りと一九五〇年代の戦後復興、そして六〇年代の高度経済成長をへて、オイルショックの克服と八〇年代経済・軍事・文化大国として国際社会に再びその威容をはこるまで、韓国社会の対日行動様式はひたすら民族主義に支えられた反日感情と、表皮的情報や刹那的経験に基づいた盲目的な親日感情の表出だけであった。

一例をみると、一九八〇年代から日本は経済大国にふさわしい「国際貢献」という名分の下、文化民族主義を強化し、政治・軍事的に超大国への意志をあらわにした。憲法改正論議の機会を掴んだことをはじめ、軍備のGNP一％枠廃止主唱、有事時に備えた自衛隊

法改正への世論操作、行政改革と国家主義教育強化など、名実ともに「大国」への道を緻密に準備してきた。

韓国が国際情勢の変化に目をそらしたまま、もっぱら鉄拳統治と民主化闘争で対立と分裂の混乱を極めているとき、韓国が一番警戒すべき隣の国日本は、イデオロギーの反動的再編を通じた大国化を着実に追求していた。しかし、日本の大国化への動きは韓国社会においては遙か遠い国の動きに過ぎなかった。親日と反日の「日」は、確かに「日本」を指しているはずなのに、韓国社会にその「日本」はなかったわけである⁸⁾。

韓国社会の関心は、民族的プライドを傷つける右翼勢力の妄言とそれへの糾弾だけに集中されていたし、時にはそのような行動様式が愛国的な行為として注目されるほど偏向的な性向を露呈するだけであつた。対日貿易赤字の増幅と日本の歴史認識に対する挑発的な発言が、韓国社会の焦りと被害意識を刺激した結果でもあろうが、冷静な対応を怠った責任も免れることはできない。

それは、二十世紀の最後まで尾を引いた。ソウルオリンピックが終わった後、韓国は次なる時代への目標意識の喪失と急激な民主化による価値観混迷が重なり、国内外の一般的な予想を破って「アジア四小竜」から一匹の「ミミズ」に転落した。その時、内部から自

省の声とともに日本に学ぶべきだという動きが出版界を覆ったが、一瞬に「日本はない」という自我陶醉的反論に消えてしまったことは今も鮮明に記憶に残っている。

このような自己傲慢と無知が生み出した衆愚的対日観は、一九九〇年代の半ば頃「もはや日本の時代は終わった」という速断とともにピークに達した。外交と安保に国民の衆知を集めなければ、民族の独立と自尊を保持できないという事実をどこの国よりも韓半島の歴史が教訓として残しているのに、韓国社会の価値は内部問題や閉鎖的民族主義にとらわれ、隣の国がいかなる形で変化しているのかをいつものように知らないまま、葛藤の日々に落ち込んでいたのである。

そのため、韓国社会における日本・日本人・日本社会に対する基本的な認識は定型化された枠組みの中に閉じ込められ、少しも進展することができなかった。筆者が長い間、学生、企業関係者、一般人を対象に持続的に調査してみたが、例外なく「学ぶべきところが多い国であるが、尊敬できる国ではない、そして、時々韓半島を脅かす隣国である」というイメージにとらわれている。

結局、韓国社会の「日本像」というものは、過去と現在、そして未来の日本の価値を綿密に分析する努力の末、そこから形作られた「日本像」の共有を通じて韓日関係を進展さ

せる知恵を発揮できず、長い間ただ先験的な日本観に閉じこもっていたり、情動的次元で理解して断定する水準にとどまったりしてしまった。韓国の「The Japanese」研究も、この社会的風潮から決して自由の身ではなかった。

Ⅱ 韓国社会における「日本文化」研究

1. 先駆的日本文化論の登場と消滅

韓国社会の「日本」研究に対する関心は、過去一部の研究者たちの問題意識にもかかわらず、文化研究対象としての「日本」の存在は、韓国人が現実で日本を認識すること以上に遠く離れていた。これは、解放以降韓国社会の支配イデオロギー（反共と反日）の影響によって、日本を客観的に研究できる与件を自ら作り上げることができなかったことに一次的な原因がある。

しかし、より根本的には、このような見えざる社会的な圧力から独立しようとする意欲さえ持たず、社会的風潮に無事安逸に便乗して、研究者としての責務を放棄した学界の惰性に大きな責任がある。解放後、理由はともかく長い間「The Japanese」の虚像が韓国社

会に蔓延したのも、学界の怠慢が生み出した結果であることはいうまでもない。

学界の自己認識の不在は、一九八〇年代になると日本の歴史教育をめぐる葛藤高調と経済大国日本の実体的理解が必要だという一部の世論にも影響され、「克日」や「知日」の声を高める方向へ変わっていく。それと合わせて一部研究者たちによる日本論が、ようやく世間の注目を浴びながら登場する。

韓国人の視覚から日本文化を照明しながら、その文化の正しい批判とともに言語を覚えていくことが正道だという李御寧の問題意識と金溶雲の韓日文化比較論などは、今後の日本語教育の意味ある拡大だけではなく、国内の日本研究を活性化させるきっかけになるのではないかという期待感を膨らませた。だが、両氏の意欲的な研究成果は、残念ながら後学たちに発展的に継承されなかった。

学界の日本研究土壌の未成熟と、一九八〇年代の半ば頃から再び激しくなった民主化熱風とそれによる社会的混乱が続くにつれ、イシューとしての「日本」が研究者や国民の関心事として表に現れなかったからである。特に、ソウルオリンピック以後、韓国社会の転落がポスト東京オリンピックの日本の飛翔と頻繁にコントラストされることによって、盲目的な「日本学び論」が量産されるようになってからは、韓国社会の日本文化研究は学界

の無氣力とも相俟って、ひたすら大衆との付き合いだけに拘る傾向を強めていった。

それらの論議を支える問題意識は偏向的に流れがちであつたし、内容も主情的・予断的論調が主流をなしていた。文化研究書としての意味と客観的な研究方法論の確保といった問題意識ははじめから欠いたまま、ただ読者たちの好奇心集めに夢中になっていた。このような現象は、当時の「日本モデル論」の展開が主にマスコミ関係者や企業関係者、そして民間研究所関係者¹⁰⁾などによって主導されていたところにも原因があつた。

民族が危機的な状況に処されたとき、先進国である日本の長所を分析し、それを通じてわが民族の活路を開拓できるモデルを見つけ出そうとする努力は、たとえ研究書としての限界があるにしても決して非難されることではない。だが、徹底した自己検証と体系的な方法論に基づいた日本観の提示に苦悩するよりは、大衆迎合的次元で目の前の現象写しに夢中になる風土に埋没されていては、明日が見えない試練の中に自らを投げ出すのと同じである¹¹⁾。

要するに、二十一世紀を目の前にして、これ以上惰性に流されたまま日本を眺めてはいけない時期に、いかにも簡単に日本を韓国の発展モデルとして設定する過ちを犯したのである。その過程で、状況認識を重視する職業精神と現場の経験が一番豊かな言論・放送人

と企業関係者たちが学界の職務放棄にも助けられ、韓国社会が学ぶべき至高の価値はいうまでもなく「日本的価値」であることを集中的に伝播する「伝道師」の役割を果たした。

親日的日本論の展開を容認できなかった韓国社会の対日認識と、日本の成功を韓国の発展モデルに借定せざるを得なかった経済現実の中で、彼らが展開した現実認識論的日本論は、一方では韓国社会における既存の対日認識の変化にある種のきっかけを提供したり、

「第三世代」¹²⁾ たちには大きな刺激と反響を巻き起こしたりした側面もある。

そのため彼らの日本論には評価すべきところも少なくないが、冷静に考えれば日本学界からの日本文化研究への発信努力が皆無の状態で、現象学的な日本文化論の展開が大衆の情緒を動かすことによって、断片的な日本像が韓国社会に横行する結果を生み出したし、韓国の学界でもその流れに便乗する研究者が続出することによって日本文化研究を「研究史」の流れから逸脱させる不作用を招いた。

それに、いままでイデオロギーの観点から日本を見つめることに馴染んでいた韓国社会に、彼らのメッセージは自分たちの意図とは関係なく「日本礼讃論」に映され、対日反感と対日コンプレックスをさらに深めた側面も見逃せない。そのような不作用は、残念ながら「日本批判論」の盛行とそれに対する大衆の人気の結合という新たな矛盾を孕みながら、

日本文化論はしばらくの間また大衆的談論の領域で活気を浴びるようになる。

2. 対日関心の増大と日本文化論の開花

日本批判書¹³⁾は、日本社会の矛盾と否定的側面を直感的で感傷的に批判することによって、日本のような先進社会への進入に失敗したまま、日本礼讃論に落胆していた韓国人の自愧感を一掃する一方、昨今の混迷が決して韓国だけの問題ではなく、先進社会も一般的に経験する過程であることを認識せしめる、一種の清涼剤としての役割を果たした。

彼らの論調が韓国社会の対日コンプレックスを克服するに一助したことは間違いないが、読者たちが必ずしも彼らの論理を正当で合理的な日本論として位置づけようとはしなかった。韓国社会の国際化と情報通信文化の発達によって、対日認識に少しずつ変化の兆しが見え始めたからである。そのため、批判書の人気はすぐ反論に直面して消えてしまい、その空間に学界からの客観的な日本研究書が徐々に姿を現すようになった。

その流れを主導した民俗学者魯成煥は、韓国社会で日本文化論のブームを助長した論者たち（大部分が研究する分野に従事する者ではない）の成果と影響力を評価しながら、実際日本を研究する学界からいかなる日本文化論も提示していない現実を、学界の「職務

遺棄」と批判した。そして魯は、韓国社会の日本に対する関心の高さを学界が積極的に踏まえて、真面目な研究に基づいた日本文化論を提示する段階に来ているとのべ、自分の研究成果をまとめて発表する意欲を見せた¹³⁾。

また、歴史学者金絃求は韓国での日本文化論が、日本の現象学的分析にとどまっているあまり、その文化の歴史的な基盤分析に対する問題意識がほとんどない研究風土を批判したあと、これからの日本文化論研究は根本的な発想転換が必要だということを、自分の研究成果を通じて主唱した¹⁴⁾。

特に、金の研究は韓国社会が理解していた日本の特性の歴史的根拠を提示するとともに、それに対する一切の価値判断を留保する立場をとり、読者たちの熱い反応を呼んだ。両氏は、研究者としての自分の学問的専攻領域を十分に生かし、豊富な資料と研究方法論をもつて分析的な日本文化論を展開し、ようやく日本文化論が「研究史」の観点から論じられるようになった。

既存の叙述的、感傷的日本文化論から客観的な資料に基づいて異文化を理解しようとする研究者たちの関心と努力は、一九九八年の日本大衆文化開放を前後にして量産された日本大衆文化論の盛行においても守られてきた。その代表的な著書が筆者の『リアクション

の芸術 日本大衆文化』(二〇〇一)である¹⁹⁾

筆者はこの本を通じて、日本大衆文化の成長発展過程を社会史的な観点から分析する視点を提示することによって、日本の大衆文化が性文化や一部の放送芸能及び出版文化を中心に、極めて断片的で歪曲された形で韓国社会に紹介される動きに終止符を打つとともに、その後の日本大衆文化研究を日本文化論の領域で吸収し分析する転機をつくった。

その頃から韓国における日本論は、学界の外縁で大衆的談論の形で人気を集めていた、いわば大衆消費財のような日本論はほぼ姿を消し、各研究分野からの個別研究成果の蓄積、他専攻との「対話」を通じて得られた学際的研究成果、通史的考察や特定の主題をもつて深層的分析にこだわる日本文化論などが相次いで量産されるようになった。

特に、数年前から注目に値する多様な問題意識の表出は、今後韓国における対日研究の幅と深さを深化させていく基盤になるとともに、日本研究の底辺拡大にも大きく寄与すると思われる。学界の自省と努力による科学的な日本論が、以前と異なった次元で大衆との合一点を模索している昨今の現実を考えると、韓国社会の対日観の成熟化はもちろん、韓国における日本文化研究も新しい転機を迎えるようになったといえる。

3. 日本文化論の展開過程で表れた諸問題

朴有河は民族主義的視角で日本を眺めている韓国社会の一部の対日観を強く批判しながら、日本に対する否定的イメージを生産している一部の知識人たち、彼らの意識的或は無意識的な歪曲を拡大再生産しているマスコミ、そしてそのような報道を何の疑いもなく素直に受け入れてきた我々自身が、正に日本を「歪曲」する主体であると述べた¹⁷⁾。

朴の指摘には一応共感するところもあるが、その批判が徹底的な資料的検討や豊かな反論資料に基づいているというよりは、ほとんどが先験的・主観的・感傷的批判で一貫している。そのため学問的価値や客観的評価ができないという限界があるが、このような態度で日本論を展開している論者たちが日本学界でも現れるようになったのは恥ずかしいことである。

金ヨンミョンは一連の著書を通じて、日本社会の精神的貧困を叱咤しながら、人間の幸福と対外善隣関係を規定する文化的・思想的・哲学的土壌の不足を克服できる物質と精神的発展モデル構築の必要性を提起した。このような指摘は日本を論ずる際よく言われることでもあるが、冷静に考えてみれば物質と精神の発展を同時に追求できるモデルが果たして存在するのか、またそのようなモデルで成功した国が地球上にあるのかという疑問がま

ず浮かんてくる。

精神的貧困を強調する金の論理をみると、日本の社会を少し注意深く覗いてみれば誰もがすぐにでも確認できる現実的な諸矛盾をデパートのディスプレイのように羅列しておいて日本を評価切下している¹⁹⁾。少なくともそのような結論に至るためには、精神の貧困を招いた日本人の思想や文化構造、或いは日本人の伝統的な情緒や価値観のようなものを具体的に分析しなくてはならない。

李御寧は日本の文化構造のなかで「縮み志向」の価値観を発見し、その論理に基づいて日本の対外膨張を警戒する論点を提示した。日本の限界を指摘する論理を、日本人の伝統的な行動様式や文化構造の解明を通じて指摘したので、その論理が説得力を持つことのできた。

このような緻密な分析過程なしに、どの社会や国家にも現れがちである現象的な矛盾を指摘しながら日本を批判する姿勢は、もう一つの日本コンプレックスだと思われる。このような日本観に陥っていると、大衆商業主義の誘惑から自らを守りにくくなるのではなく²⁰⁾、自分も知らず知らずのうちに偏見にとらわれ、緻密な分析対象として日本文化を研究しようとする学問的熱情の喪失と日本文化研究の方法論の鍛錬を怠ることになる。

この部分に対する魯成煥と金絃求の問題提起は評価できる。両氏は、いままで日本文化研究に見えなかった方法論の不在を指摘しながら、日本文化研究にフィールドワークを前提にする民俗学・人類学的研究方法や歴史学的研究方法論の導入などを主張した。このような主張は、決して新鮮とはいえないが²⁰⁾、方法論鍛錬の主唱が大衆的談論の領域に留まっていた日本文化研究の停滞性を打破するきっかけになるとともに、問題意識と研究方法論の確保なしには日本文化研究の進展はないという確かなメッセージを伝えたことは意味があった。

実際、その後、日本文化研究は学界からの多くの注目の中で様々な研究書が出版され、読者たちの関心を呼び起こした。その中でも注目に値する動きは、個別専攻領域の研究成果に基づいた多面的接近とそれによる総合的な日本文化理解書の登場である²¹⁾。多面的接近方法は一九八〇年代末の「日本学び」論を通じても流行ったことがあるが、そのときと異なる点は、以前のような現象学的な接近ではなく、深層的・歴史的・学際的接近を試みているという点である。

例えば、嶺南地域の日本研究者が共同執筆した『新しい日本の理解』（二〇〇二）などは、歴史・社会文化・政治分野の専攻者多数が学際的な視点から、若者たちの成熟し均衡

の取れた対日観の定立に貢献したいという目的で出発した。いままで日本文化研究の「豊饒の中の貧困」状態を克服し、韓国の未来を担っていく若者たちに日本の歴史やイデオロギーの特質を正しく伝えたいという意志であった。

だが、このような一連の研究書にも限界があった。問題意識と分析内容がまったく一致していない上、共同研究の根本的な趣旨も生かせないまま、大部分がばらばらの自己主張に終わってしまった。多面的接近が追求する共通分母、いわば多面的日本文化研究の趣旨と方法論の模索などに対する真摯な苦悩が欠如されている状態で、「学際的研究」という名ばかりが唱えられたからである。

4. 日本文化研究の活性化のための提言

具見書は、客観的で現実的に存在する日本文化の存在形態という観点から広範囲な有・無形の日本文化を「体系化」し、総合的に理解する必要があると述べた²³⁾。このような問題意識は、日本社会に多岐にわたって存在する文化現象を分類し、読者たちの理解水準を高めるには有効であるが、その多様な文化現象を全部主題に設定し、その現象の内面的意味や価値を一貫した論理で分析できる方法論と結びつけて論じなければあまり意味がな

い。

従って、筆者は今後の日本文化論の論議を深化させていく方向性として、まず日本・日本人・日本社会が体现する一般的情緒や心理及び伝統的な思维様式が反映された文化様態を、通史的観点ないしは社会構造的な側面で包括的に分析した研究書を「日本文化論」の範疇に規定しようとする。そして、そのためには最低でも二つの前提条件を満たさなければならぬ。

一つ目は、日本人の意識構造と行動様式、伝統思想や慣行、法や制度（或は他の論点）などに基づいた一貫した論理で日本の社会文化の諸現象を規定する内面的特性を分析する問題意識を持つべきである。つまり、意識構造や行動様式の分析↓それを孕む社会構造の分析↓日本文化の特徴解明↓他文化との比較などを論ずる問題意識が重要である。

二つ目は、問題意識を客観的な結果に導き出すための幅広い資料の収集と科学的な研究方法論の鍛錬が必要である。特に、方法論においては例えば、現実生活における日本人の思维様式の独自性の分析、思维様式とその集合体である文化様態の相関関係分析、その結果として規定された制度や慣行などが、また、日本人の意識世界を束縛する形態を、連続・循環的に分析する方法論の鍛錬が重要である。

分析対象の主題設定に対する問題意識、充実した資料の確保と分析、そして先験的価値観にとらわれない研究方法論の鍛錬などは、論理の飛躍とか歪曲を根源的に遮断するだけではなく、異文化の深層的理解を可能にする出発点である。日本の国内外から注目を浴びてきた日本文化論と接していると、いずれもこの「基本」に徹していることがわかる。

韓国の日本学界における日本文化論の開花が、韓国社会の対日観の変化を適切に反映しながら日本文化論Ⅱ大衆的談論という等式を破ったこと、日本研究の停滞性打破と新しい研究視角提示、研究分野の多様化と韓日学術交流の基盤構築に貢献、韓国内部の意識対象としての「日本」ではなく、客観的研究対象としての「日本」像の定着、などの成果を上げたにもかかわらず、インパクトの強い日本文化論がなかなか登場しないのは、二つの前提条件Ⅱ基本が研究者のマインドの中に刻印されていなかったからである。

韓国における日本文化水準が今より一段階高いレベルで議論できる環境を作り上げるためにも、研究者の自己反省とともに残された課題に積極的に取り組もうとする意欲が必要である。未だに日本学界では、文化に対する深い洞察力なしに、文化研究は誰もがたやすく接近できる主題のように認識し、文化研究書の学術的価値を軽視する傾向が残っている。文化研究に対する理解不足は、韓国日本学界における文化研究の生育基盤の弱体化と大学

の実績主義の弊害とが相俟って、また新しい問題を生み出す可能性も排除できない。適当な意味づけをした雑論が日本文化研究書に化けて、読者たちの知的好奇心を惑わす現象が再び顕在化するかもしれない。従って、今後の日本文化研究の深化を決して樂觀することはできない。

いずれにしても実は文化研究は大変難しい主題であり、主情的観点から簡単に接近してはいけないという前提条件が必要である。要するに、極めて平凡な真理を研究者たちが認識したうえで文化研究に邁進するとき、はじめて韓国の日本文化研究も外から注目されると思われる。

Ⅲ. 韓国社会の「日本文化」の再認識

1. 韓国社会が理解すべき「日本的価値」論

栄辱の二十世紀を終えた韓国社会は、「成長社会」から「成熟社会」に向かって価値観の新たな国民的合意を急いでいる。それと相俟って対日観も変わりつつある。盲目的な親日や反日の感情は影を潜めており、他者として日本を客観的に眺めようとする動きが大勢

を占めている。言い換えれば、韓国社会の対日観も成熟さを増しているということである。こうした変化の中で韓国社会が一番優先的に理解すべき「日本的価値」(＝日本・日本人・日本社会が歴史を通じて一つの文化的伝統として形作ってきた特徴)は何であろうか。まずは、何よりも日本人の行動様式の特徴であろう。それを筆者は、勤勉、儉約、正直、和合、といった日本人の伝統的なモラル＝通俗道德の実践倫理に注目することを提言する。これは、支配階級の道德であった儒教とは異なつて、主に自己鍛錬・自己省察の論理を強調した庶民たちの道德であり、歴史的に見れば、石田梅岩の心学や、二宮尊徳の報徳運動、本居宣長の国学、そして仏教諸宗派の日常的な教えから影響をうけている。

庶民たちの普遍主義的道德として位置づけられた通俗道德は、特に自然災害や経済状況の危機のような時には、自己鍛錬を通じた強い忍耐力をばねに難局を突破する核心価値として遺憾なく発揮されたし、近代社会への移行期には日本近代化を下から支える原動力にもなった²³⁾

また、敗戦直後には戦後復興の土台として、一九九〇年代の「失われた十年」の間には、日本社会が今まで経験したことがない危機を乗り越える精神的基盤としても機能した。時空を超越して働かされている通俗道德の価値が、日本人の伝統的な日常生活の実践倫理と

して強調されている背景には、このような歴史性が受け継がれているからである。

ここから日本的集団主義文化の基盤と特徴が形成し始める。日本の集団主義は、相互信頼を前提にする以心伝心のコミュニケーション文化が定着している。一般的な組織文化をみても、勤勉・正直・和合の精神をもって真面目に働くと、その結果として組織の発展はもちろん、それに対する代価としての自分の平和と安寧が保障されるという認識が組織文化の底辺に流されている。

このような精神は、日本の企業文化を通じて明確に確認できる。日本を代表する企業の経営哲学や社訓などをみると、「すべての人々に信頼され」「顧客の信頼を得て」「信頼される会社」「信頼に応える」といった文句を好んで使っている。日本社会があらゆる関係性の文化において、正直と信頼に基づいた「和」を追求する伝統的な行動様式を、いかに強調しているのかがわかる。

日本社会で「和」の論理の歴史的根拠を論じる時、聖徳太子の第十七条憲法の精神をよく借用している。その趣旨を一言で言えば「みんなが仲良く争わず協力しろ」という単純明快な論理である。これを逆説的に解釈すれば、和を損なう行為を日本社会は一番嫌がることになる。このような日本社会の「常識」は、個人の能力と創意性をもって日本の改革

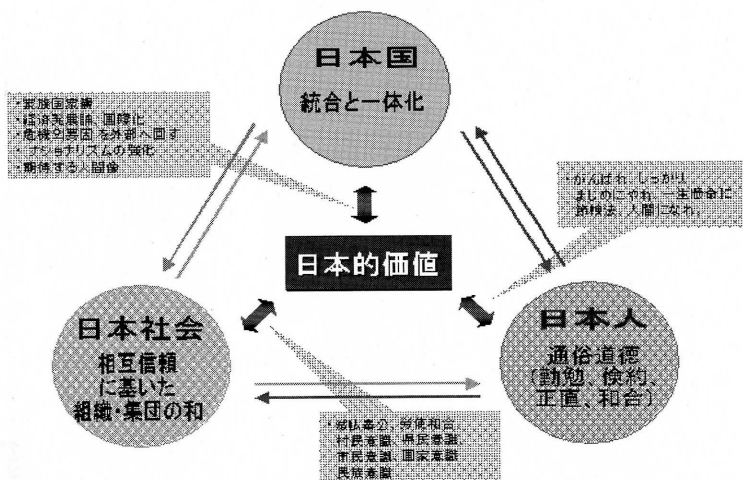
を実現すべきだと唱えられた一九九〇年代においても、決して崩れなかった価値である。

和の精神は単純に和合の行動様式だけを代弁しているわけではない。昔から日本の文化を強調するときには、いつも「和」という言葉を愛用してきた。日本人の情緒と思想を反映しているこの言葉は、実際食べ物を含めた様々な日常の文化に適切に反映されている。

それだけではない。「和」は「和魂洋才」精神が物語っているように、日本人の絶え間ない挑戦や変革精神、そして個人や集団の発展を促す核心的価値としても機能している。

通俗道徳を前提にする共同体の生活様式とこれに支えられた集団主義文化の伝統は、支配体制の安定化、つまり、組織や国家の統合を容易にする画一的イデオロギーの確立にも積極的に貢献している。特に、十九世紀にはいつて内憂外患という難局を克服し、近代国家の創出を先導する支配理念として天皇制イデオロギーを確立してからは、天皇はいつも国家支配体制の頂点に君臨しながら日本人の精神的領域を完全に掌握していった。

それが可能になった背景としては、すでに丸山真男が『日本の思想』で指摘しているように、支配イデオロギーの下降を容易にさせる情緒が共同体の底辺に形成されていたという事実と無関係ではない。通俗道徳的思維様式がその体制の構築に寄与したのは言うまでもなく、その延長線上で近代日本の「機軸」としての「国体」思想の創出が可能となった。



敗戦直後にも日本の朝野は、天皇を頂点とする国体の維持にすべてをかけた。天皇の存在は、日本の歴史と日本国のアイデンティティを規定する中核的価値だったからである。その精神文化を見抜いたアメリカも、日本朝野の「救命運動」を素直に受け入れるとともに、天皇の存在を国民統合の象徴の形で転換させ、戦争責任から免罪符を与える大胆な融和策をとった。

その結果、天皇の地位がイデオロギー的に退色されたものの、天皇の役割と機能、そして日本人の意識世界に内在している観念的崇拜思想は少しも変わらぬまま今日に至っている。このような情緒一般が、今日日本社会の右傾化現象を促進する根源の一つであることは注目に値する。

以上のあらましを見ても、韓国社会が理解すべき日本・日本人・日本社会の全体像は決して簡単ではない。これらの有機的関係が歴史を通じて日本の文化として形作られたのがいわゆる「日本的価値」である（表参照）。その特徴を韓国社会が「日本文化」として客観的に理解すること、その道程が近代以後韓国の歴史が我々に残した教訓である。

2. 日本的価値と韓国・アジア

学問の魅力の一つが「社会への発信の場を確保すること」²⁴⁾にあるとすれば、文化研究は特にそれを大事にしなければならない。日本的価値に対する韓国社会の客観的な接近は、①韓国社会という観点から見れば、「他者」としての「日」の理解、いわば成熟した対日観の確立を意味するものであり、②学界の観点から見れば、科学的で体系的な日本研究風土を韓国の日本学界に定着させる、いわば日本文化研究の新しいパラダイムを模索する出発点であるという意味を持っている。

これによって韓国社会は、日本研究の生育基盤の強化、研究成果の社会との共有基盤強化、日本との知的交流基盤強化という課題を築き上げることができる。そして、究極的には韓日善隣友好関係構築の強固な地盤づくりを自らの力で固めることができる。自己反省

と自己帰責の論理をもって相手の変化を求める開かれた対日観が、二十一世紀の韓国社会の対日認識でなければならない。

一方、二十一世紀はアジアの時代だといわれている。歴史、文化、宗教、地理的要因など様々な限界にもかかわらず、アジアでは日本に次いでNICs、東南アジア、中国などが相次いで目覚ましい経済成長を成し遂げている。それに、資源、人口、先端技術、市場といった確固たる基盤も保有しているのです、その可能性は確かに高いといわざるを得ない。

だが、アジアの時代を開こうとすれば、アジアの政治的安定と自由民主主義価値の定着、閉鎖的民族主義の克服、文化疎通構造の確立、東北亜の緊張緩和などのような前提条件のもと、アジアを先導できる経済力と文化力を保有している日本の役割とそれに対する日本社会の自覚が必要である。要するに、国際社会の「バランス・オブ・パワー」に貢献できる日本・日本人・日本社会の「ノーブレス・オブリージュ」意識の定着が大事である。

日本政府は、プレイング・コーチとしての認識再考を通じて、膨張主義の誘惑を克服し、アジアの国際化とアジアの共同体構築に向けて、自分の役割が何かを真剣に考えなければならない。日本人は、自己本位的行動様式の再考を通じて、アジア人に対する差別的他者観を克服し、「誠真」の姿勢で「草の根外交」を真摯に実践し、日本社会は、偏狭なナシ

ヨナリズムの再考を通じて、アジアに共鳴できる「日本ブランド」の発信に努めなければならぬ。

一部の識者たちは、「二十一世紀、世界は日本化する」と唱えている²⁵⁾。それを証明でもするかのうちに、この頃日本は国際社会にむけて「主張する外交」と「日本らしい国際貢献」を強調している。このような理念はその正当性にもかかわらず、ややもすればアジアの対日経済・文化従属構造の強化と相俟って日本的価値の膨張主義を刺激する可能性もある。

「アジアが日本に屈する」ことを日本の識者たちが叫びだす²⁶⁾と、アジアは日本に対する消耗的な警戒心理を高めるしかない。アジア諸国の急激な自己変身と東北亜の緊張高潮の危機に直面し、それを乗り越え一つのまとまった形でアジアの時代を開いていくためにも、日本的価値はいかなる貢献ができるか、そういった論議が日本社会でより活発に行われてほしい。アジアはそれを待ち望んでいる。

- 1) ジュリアン・ワイズ『アジアの世紀が来る』（堤誠子訳）ダイヤモンド社、一九九二、一九四頁
- 2) エズラ・F・ヴォーゲル『アジア四小龍』（渡辺利夫訳）中公新書、一九九三、六八頁
- 3) サミュエル・ハンチントン外『文化が重要である』（リジョンイン訳）キムヨン社、二〇〇一、

八〇九頁

4) 金九『白凡日誌』(ウヒョンミン訳) ソブン堂、一九九五 参照

5) 『わが外交の近況』一九八五年度版、外務省、五七頁

6) 二〇〇七年韓国の対日貿易赤字は二九九億ドルを記録した。最近十年間だけでも二〇〇〇億ドル超の赤字を記録している。国交正常化からいまままで延べ三二〇〇億ドルの貿易赤字を記録するなど、年々深刻さを増しているが、これ以上の悪化はお互いに大きな負担になる。両国が知恵を絞って解決策を講じなければならない。

7) 関西大学東西学術研究所『芳洲外交関係資料・書翰集』関西大学出版部、一九八二、八二頁

8) 崔吉城教授は、親日と反日の「日」は日本を指しているながらも、直接日本を対象にしているのではなく、韓国内部の意識対象としての「日本」を対象にしているという。そのため、反日は日本に抵抗することを意味するが、その鋭鋒は日本に向かっておらず、いつの間にか反日の韓国人が親日の韓国人を攻撃する構図に変わってしまったという。このような構図の成立は、韓国社会の分裂と葛藤を意味することであって、日本と直接的に関係する国際化や民族主義は次の問題だと指摘している。崔教授の指摘は、韓国社会における反日意識の実体に対する新たな問題提起をしたと思われる。『親日』と『反日』の文化人類学』明石書店、二〇〇二、一七頁

9) 例えば、李御寧『縮み』志向の日本人』(学生社、一九八二)、金溶雲『韓国人と日本人』(全四巻、ハンキル社、一九九四、一九七〇年代の末頃から出された氏の比較文化論は、その後シリーズとして一九九四年にまとまって出版された)、朴俊熙『拡大志向』の日本人』(東信堂、一九八六)などがある。これらの日本文化論書は、一九七〇年代のマスコミ関係者たちの「日本観覧記」による日本理解の流れに終止符を打って、日本文化研究に新しい活路を開いていくかに見えた。

10) 主な著書を取り上げると、李渡ヒョン『日本、もう一度見て考える』(朝鮮日報社、一九八八)、

李ジュヨン訳『我々が日本から学ぶべきことは』（朝鮮日報社、一九九二）、金義均『スパ隣国、日本が走っている』（ハヌルとタン、一九九二）、新韓総合研究所訳『日本経済の今日と明日』（高麗苑、一九九二）、『日本企業は世界をこのように攻略する』（リジャンチュン訳、一九九三）などがある。

11) 例えば、連合通信が「親日派の誤解を覚悟する上でこのシリーズを企画した」という『また立ち上がった日本―その力はどこから』（三栄印刷、一九九一、序文参照）の場合は、割合にまとまった日本人・日本社会論を提示した。だが、隣の国を肯定的に評価するのに、これほど苦悩に満ちた言説を吐かなければならないほど当時の韓国社会が硬直していたのを考えれば、まともな日本論を期待するのは無理があつたのかもしれない。

12) 李渡ヒヨンは、韓国で生まれて幼いときから「わが国いい国」を歌いながら育つた「幸福な世代」が韓国の絶対多数を占めていると指摘したうえ、彼らは幸か不幸かわからないが日本を知らないまま生きているという。李氏は、彼らを「第三世代」と呼んでいる。『日本、もう一度見て考える』朝鮮日報社、一九八八、一〇頁

13) 代表的には、田麗玉『日本はない』（知識工作所、一九九二）、金ヨンミョン『日本の貧困』（未来社、一九九二）などがある。

魯成煥『箸の中から見た日本文化』キョボ文庫、一九九七

14) 金絃求『日本物語』創作と批評社、一九九六

15) 一九九八年日本大衆文化開放を前後にして出版された二十余種の日本大衆文化論はほとんどが日本の性文化や芸能文化の紹介及びそれに対する叙述が主流をなしていた。この中で筆者は、拙著である『リアクションの芸術 日本大衆文化』（セウム、二〇〇〇）を通じて、日本大衆文化の成長・発展過程を戦後の日本社会の変化の中で分析した。筆者の意図は、狭義的には日本の大衆文化がこ

れ以上断片的に歪曲された形で韓国社会に紹介されては困るということと、広義的には日本文化論がまた学界の外縁で無分別に拡大される現象だけは止めたいという思いがあった。

18) 17) 朴有河『誰が日本を歪曲するのか』社会評論、二〇〇〇、参照

このような金の対日観は『日本の貧困』（未来社、一九九二）を通じて露になったが、その後出版された『コンプレックスの国日本』（乙酉文化社、二〇〇二）においても同じ観点から日本を論じている。

20) 19) 代表的には、モセジョンの『日本をまな板のうえにのせて』（デュナム、二〇〇〇）がある。

魯成煥、金絃求の『前掲書』参照。魯の提示した方法論は、『菊と刀』ですでに検証された方法論であるがため、新しい視点とはいえない。また、金も『菊と刀』が日本の特徴の歴史的由来を解明できなかったという批判の上、歴史学的研究方法論の正当性を論じている。だが、両者とも論理の新鮮さも批判的も正しくない上、自分たちの研究も自分たちの問題意識を前編を通じて貫くことができなかったことは批判されても仕方がないと思われる。

21) 代表的には、尹相仁『日本を強くさせた文化コード16』（ナムとスプ、二〇〇〇）、日本学教育協議会『日本の理解』（太学社、二〇〇二）、朴晋雨外『新しい日本の理解』（多楽フォン、二〇〇二）、リュキョヨル外『日本は我々に何であろうか』（チェクサラン、二〇〇二）などがある。

22) 具見書『現代日本文化論』時事日本語社、二〇〇〇、参照

23) 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店、一九七四参照

24) 小松和彦『人類学・民俗学の四十年を振り返って』『日本文化の人類学／異文化の民俗学』法蔵館、二〇〇八、七七一頁

25) 日下公人『二一世紀、世界は日本化する』PHP研究所、二〇〇〇、参照


26) 長谷川慶太郎『アジアが日本に屈する日』ビジネス社、二〇〇五、参照

発表を終えて

小松和彦先生は学問の魅力を「知的わくわく感、目からウロコ感を与えること」だと指摘しながら、その成果を社会に発信し、世間なり、学生なり、学者なりがどういう反応を示すか、社会的な話題になりえたか、そのレベルでの戦いだと述べている。この定義は、韓国における日本研究者の一人として「対社会的貢献」の有り様を常に考えてきた私にとって、実に大きな励みとなった。韓国における日本文化研究の持っている一つの意味がここにあると考えていたからである。

私はその意味を、今度は日文研のフォーラムを通じて日本で体験できる機会を与えて頂いた。自分の日本研究の成果を、韓国社会に対して（学界、学生、世間に）持続的に発信してきたそのメッセージが、日本の世間にいかなる形で受け入れられるだろうか、ドキドキする気持ちでフォーラムに臨んだ。多くの方々から意見が寄せられた。批判と激励が混在する中で、反省すべきことや研究のたりなさも強く感じた。

国との関係における知的交流は大事である。自己反省と他者への理解を深める近道だからである。これを怠ると韓日両国の善隣友好関係の構築は難しいということを今回改めて体験した。その分、これからの日文研の役割と存在意味も益々高くなるだろうし、個人的にも責任感を重く感じる。今回、私は今までの日本研究の成果と今後の課題、そして研究者としての歩みを、もう一度じっくり振り返る貴重な機会を持つことができた。感謝の気持ちをこめて、世界の日本文化研究の活性化のためにも
日文研のさらなる発展と貢献を期待したい。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
101	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
102	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-gyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
104	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
108	10. 6. 9	<p>SHIMAZAKI Hiroshi 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩⑨	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪⑩	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪⑨	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顯陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マ リ ア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⑩	11. 7.13	R E E C E Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫⑪	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫⑫	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫⑬	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑭	11.12.14	X Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑮	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガ デ レ ヴ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑯	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・ト レー ン ハ ル ト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑰	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユウスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑬②	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Bye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬③	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィツチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬④	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬④	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑬⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑧	13. 4.10	L I Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④①	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭④②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラステイーブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭④③	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭④⑦	14. 2.12	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マツシュー フイリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑮⑩	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮⑪	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボ ロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑮⑬	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑮⑮	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

①60	15. 4. 8 (2003)	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	PARK JeonYull 朴 鎰烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツィゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
①65	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
①66	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バクシエフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
①69	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

①70	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
①71	16. 7.13	Виктор-Викторович Рибин Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	Александр-Маршалл Вейсей Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
①77	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ… 芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気」
①78	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究中心専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって—」
①79	17. 4.12	ノエル ジョン ピニンガトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マク マ レ ン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブローックカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
①82	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベル ク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯 成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラブチュフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本言語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュー ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—」
188	18. 2.21	ウィリアム バック ブレツカー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ—江戸時代の郊外における美学的スペース—」
189	18. 3.14	サ レ アーデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話—日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐる—」

190	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金 容儀 (全南大学校人文学部助教授・日文研外国人研究員) 「玄界灘を渡った鬼のイメージ—なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか—」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔 博光 (成均館大学校教授・日文研外国人研究員) 「京都と文化表象—18世紀朝鮮通信使の目から—」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉 春英 (東北師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
193	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周 維宏 (北京日本学研究中心教授・日文研外国人研究員) 「近代化による農村の変貌とその捉え方について—中日農村を比較して—」
194	18. 9.19	ダリア シュバンバリーテ Dalia SVAMBARYTĖ (リトアニア ビリニウス大学講師・日文研外国人研究員) 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐる」
195	18.10.10	エドウィーナ パーマー Edwina PALMER (カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員) 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」—高等教育の社会科カリキュラムを中心に—」
196	18.11.14	ヨセフ キブルツ Josef A. KYBURZ (フランス国立科学研究センター教授・日文研外国人研究員) 「お札 <small>ふだ</small> が語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート エスキルドセン Robert ESKILDSEN (日文研外国人研究員) 「異国船物語—江戸後期に描かれた船—」
198	19. 1.16 (2007)	プラット アブラハム ジョージ Pullattu Abraham GEORGE (ジャワハルラル ネルー大学日本語学科準教授・日文研外国人研究員) 「日印関係とインドにおける日本研究—宮沢賢治の素食主義の思想—」
199	19. 2.13	スティリアノス パパアレクサンドロプロス Stylianos PAPALEXANDROPOULOS (アテネ大学神学部 準教授 日文研 外国人研究員) 「日本仏教論—その思想的展開をめぐる—」

200	19. 3.13 (2007)	LU Liu Di 陸 留弟 (華東師範大学外国語学院日本語学部教授・日文研外国人研究員) 「楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—」
201	19. 4.18	モ ハ メ ッ ド レ ザ サ ル カ ー ル ア ラ ニ Mohammad Reza SARKAR ARANI (アラメ タバタバイ大学教育学部(イラン)助教授・日文研外国人研究員) 「国境を越えた日本の学校文化」
202	19. 5.16	ZHANG ZheJun 張 哲俊 (北京師範大学文学院比較文学研究所教授・日文研外国人研究員) 「唐代文学における日本のイメージ」
203	19. 6.13	チャワーリン サウ エ ッ タ ナ ン Chavalin SVETANANT (チュラーロンコーン大学専任講師・日文研外国人研究員) 「『気』の思想・『こころ』の文化—言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方—」
204	19. 7.25	シン シ ア ネ リ ザ ヤ ス Cynthia Neri ZAYAS (フィリピン国立大学国際研究センター準教授・日文研外国人研究員) 「淡路島における災害と記憶の文化—荒神信仰を中心に—」
205	19. 9.11	チャン ティ チュン トアン TRAN Thi Chung Toan (ベトナム国立ハノイ国家大学助教授・日文研外国人研究員) 「宮本常一の民俗誌を通して見た日本女性と日本文化理解」
206	19.10.10	ペイ ヒ ヨ ン イ ル PAI Hyung Il (カリフォルニア大学サンタバーバラ校準教授・日文研外国人研究員) 「朝鮮旅行案内書に見る日本人のロマン」
207	19.11.14	KIM YoungCheol 金 榮哲 (漢陽大学校日本言語文化学部教授・日文研外国人研究員) 「遊興の『花』としての理想—妓生と遊女—」
208	19.12.12	WANG Weikun 王 維坤 (西北大学国際文化交流学院教授・副院長・日文研外国人研究員) 「中国出土の文物からみた中日古代文化交流史—同開珎と井真成墓誌を中心として—」
209	20. 1.16 (2008)	ブライアン 小 野 坂 ル バ ー ト Brian Onozaka RUPPERT (イリノイ大学東アジア学科・宗教学科准教授・日文研外国人研究員) 「懺悔・供養・修法 —前近代日本仏教の心を探る—」

210	20. 2.26 (2008)	マイク モラスキー Michael S. MOLASKY (ミネソタ大学准教授・日文研外国人研究員) 「関西のジャズ喫茶文化」
211	20. 3.18	グニラ リンドバーグ ワダ Gunilla LINDBERG-WADA (ストックホルム大学主任教授・日文研外国人研究員) 「北極から日本へ—スウェーデン探検隊が見た明治日本—」
212	20. 4.23	ZHOU Jian 周 見 (中国社会科学院世界経済政治研究所教授・日文研外国人研究員) 「渋沢栄一と張謇—日中近代企業家に関する一つの比較—」
213	20. 5.14	KIM Jeong Hae 金 貞恵 (釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「小説を通してみたグローバル時代の在日コリアン」
214	20. 6.11	フレデリック ジラルール Frédéric GIRARD (フランス国立極東学院教授・日文研外国人研究員) 「ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ—エミールギメと日本の僧侶神主との問答—」
215	20. 7. 9	アレキサンダー ヴォヴィン Alexander VOVIN (ハワイ大学マノア校東洋言語文学部教授・日文研外国人研究員) 「萬葉集に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

発行日 2008年11月10日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

©2008 国際日本文化研究センター

■ 日時

2008年9月11日（木）

午後2時～4時

■ 会場

ハートピア京都

第三回 韓国における日本研究が語るもの